



性的行為の定義

長谷, 奏音
大畑, 浩志
新川, 拓哉

(Citation)

神戸大学文学部紀要, 53:1*-17*

(Issue Date)

2026

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100503526>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100503526>



性的行為の定義¹

長谷 奏音、大畑 浩志、新川 拓哉

Abstract

Paddy McQueen (2021) defines sexual acts in terms of the intention to satisfy sexual desire. This definition successfully includes actions like masturbation, which are intuitively recognized as sexual, unlike more conservative definitions that emphasize interpersonal relations and desires toward others. However, McQueen's definition fails to encompass a category of sexual acts, namely those involving the instrumental pursuit of sexual pleasure. To address this limitation, this paper proposes a simpler yet more inclusive definition: a sexual act is an act intended to obtain sexual pleasure for oneself or to provide sexual pleasure to another person.

¹ この論文は、2022年12月末に亡くなられた、神戸大学人文学研究科の大学院生であった長谷奏音氏を筆頭著者とするものである。生前に長谷氏が日本科学哲学会の大会で発表した原稿を、長谷氏のご両親の許可を得たうえで、長谷氏の元指導教員である新川と、性愛の哲学を専門とする大畑浩志氏が協力しながら改稿したものとなる。改稿にあたっては、元原稿で長谷氏が提示した説を補強する議論を展開し、その学術的妥当性を示すことを方針とした。したがって、性の哲学分野に対する本稿の学術的貢献は主に長谷氏に帰せられる。

0 はじめに

ある行為が性的であるとはどのようなことだろうか。たとえばセックスをすることや自慰をすることは、多くの場合に性的な行為であると考えられる。またこれらの行為は、肌を軽く撫でたり、身体を軽く押したりする動作を含み、これらもまた性的行為であるといえるだろう。しかしこのような動作は、たとえば仕事の会議中にふと自分の頬を軽く撫でるときのように、性的ではない生活のなかでも頻繁に行われている。それならば、セックスの最中に肌を撫でる行為と、会議中に自分の頬を撫でるという行為を、一方は性的であり他方はそうではないというように分けるものは何なのだろうか。

性的行為を定義する有効な方法のひとつは、あきらかに性的であると考えられる行為をあげてゆき、それらに共通する要素を特定することである。そして、セックスや自慰に共通するもっともプリミティブな特徴は、性的部位の興奮ないし性的快楽であるだろう。パディ・マックイーンはこのような考えに従って、性的快楽への欲望、すなわち性的欲望を満たすという意図を含む活動（an activity involving the intention to satisfy sexual desire）として性的行為を定義する（McQueen 2021: p.454）。本稿において我々は、マックイーンの定義は基本的に従来の提案よりもよくできている一方、「欲望」という概念を組み入れることにより性的行為の幅を不当に狭めていると主張する。その上で彼女の定義を修正し、「性的行為とは、性的快楽を得ること、または、性的快楽を与えることを意図した行為である」というよりシンプルな定義を提案する。また、この定義がマックイーンの定義がもつメリットを受け継ぎつつそのデメリットを回避できることを示す。

本稿の流れは以下の通りである。まずマックイーンによる性的行為の定義を取り上げ、これが「快楽」と「意図」を両輪とすることにより既存の定義の難点を払拭していることを確認する（第1節）。次に、マックイーンの定義からはこぼれ落ちるタイプの性的行為、すなわち「道具的に性的快楽を求める行為」

性的行為の定義

というものが存在し、これは我々が提案する新しい性的行為の定義によってはじめて捉えられると論じる（第2節）。最後に、我々の議論に向けられうる批判に応答する（第3節）。

1 マックイーンによる性的行為の定義

マックイーンは、「性的活動（sexual activity）とは、私が自分自身または性の行為を行う相手の性的欲望、すなわち性的快楽（身体の性的部位が直接的または間接的に関与する快楽）への欲望を満たすことを意図して行うものであると定義できる」（ibid.: p.453）と述べる。この定義において、性的活動は性的快楽をベースとしてボトムアップ式に定義されている。すなわち、身体がもつ性的部位の観点から定義された性的快楽がもっとも根底にあり、その性的快楽から性的欲望が、そして性的欲望から性的活動が説明される。マックイーンの使用語法における「性的活動」は「性的行為（sexual act）」と同義的に用いられていることを踏まえて（cf. ibid.: p.461）、彼女の考えを次のようにまとめたい。

性的行為：自分自身または性的行為を行う相手の性的欲望を満たすことを意図した行為

性的欲望：性的快楽への欲望

性的快楽（sexual pleasure）：身体がもつ性的部位が直接的または間接的に関与する快楽

マックイーンの考えの特色について二点指摘しておこう。第一に、何らかの快楽が「性的」であることは、その快楽がたとえばヴァギナやペニスといった性的部位と直接的ないし間接的に関わっていることにより定義されている。この「関わり」の内実については、生理学的観点から明確化が可能だろう。加えて、性的部位と快楽の関係は「間接的」であってよい。これは、たとえば首や

耳といった非性的部位に対して刺激が与えられていたとしても、その刺激から性的部位の興奮反応が生じていれば、それは性的快楽だといってよいということだ。したがって、たとえば背中を揉むといった行為は、それだけでは性的か非性的かは決まらない。その行為から背中に生じた快楽は、性的部位の興奮反応を伴っているならば性的であり、そうでなければ性的ではない²。

マックイーンの定義における第二の特徴は、「意図」という認知的な概念を含みつつも、その根底に「快楽」という感情的状態 (affective states) を置いていることだ。それゆえこの定義は、性的行為の認知的側面と非認知的側面をバランスよく取り入れることに成功しており、これまで提案されてきた性的行為の定義のなかではもっとも有望なものだと思われる。以下では、性的快楽のみに着目したグレイ (Grey 1978) の定義、そして、性的行為を行う相手に対する意図を強く重視したネーゲル (Nagel 1979) とゴールドマン (Goldman 1977) の定義が抱える問題を確認し、マックイーンがこれらの問題をどう回避しているのかをみてゆく。

1-1 グレイの問題：意図について

性的行為を定義する有効な手法のひとつは、明白な性的行為に共通する要素を特定することだ。そしてその「要素」としてもっともわかりやすいのは、性的快楽であるだろう。それゆえ性的快楽を用いて性的行為を定義する試みは数多くあるが、その基本形はグレイ (Grey 1978) のものである。グレイによれば、「ある活動を性的活動とするのは、そこから引き出される快楽の性的な性質に他ならない」のであり、「いかなる活動も、性的快楽が引き出されない限り性

2 このような性的快楽の器質的定義は、シャファー (Shaffer 1978: p.186) やプリモラッツ (Primoratz 1999: p.46)、アブラムソンとピンカートン (Abramson and Pinkerton 1995: p.8) によって支持されており、マックイーンも彼らの考えを引いている (cf. McQueen 2021: p.452)。性的部位が直接かわるわけではない、首や耳で生じる性的快楽の可能性は、プリモラッツ (ibid.) も詳しく議論している。ただし、その可能性がどのように認められるのかという点において、マックイーンはプリモラッツよりもはるかにシンプルな根拠づけを行なっている。

的活動ではない」(ibid.: p.194)。 그레이は性的行為を以下のように定義する。

性的行為：性的な性質をもつ快楽が引き出される行為

これは性的行為を性的快楽によって素朴に説明したものであり、「性的な性質」の内実を保留しておくならば、ある程度説得的な定義である。

しかしマックイーンによれば、性的快楽の存在は性的行為に関して必要でも十分でもない (cf. McQueen 2021: p.451)。まず、 그레이の見方では、性的快楽を引き出そうとセックスをしたにもかかわらず、それを引き出すことに失敗したケースが性的行為ではなくなってしまう。たとえば、未経験者同士のセックスは往々にしてそのようなものだ (cf. Halwani 2018: p.160)。しかしこのケースはあきらかに性的行為である。したがって、性的快楽の存在は性的行為にとって必要ではない。他方で、ミシンの振動により意図せず性的快楽を得てしまったケースで、ミシンの操作が性的行為だというのは直観に反している。それゆえ、性的快楽は性的行為にとって十分でもないことがわかる。

このような 그레이の定義の問題を回避するためには、性的快楽を求める「意図」に着目すればよい。上述のセックスのケースでは、性的快楽は引き出されていないけれども、行為者は性的快楽を求める意図（そして与える意図）をもっている。ミシンのケースでは反対に、性的快楽が引き出されてはいるものの、しかし行為者は性的快楽を求める意図をもっていない。したがって、性的行為の定義に性的快楽を求める意図の存在を組み込めば、快楽が得られなかったセックスのケースを性的行為へ、そして快楽を得てしまったミシンのケースを非性的行為へと適切に分類することができる。

1-2 ゴールドマンの問題：他者について

ここまで我々は、性的行為の定義に意図を組み入れることの重要性を確認してきた。ところで、これまでの性愛研究では一般に、意図に着目する論者

は性の理性的側面や他者性を重視する傾向にある（cf. Solomon 1974, Scruton 1986）。その代表例はネーゲル（Nagel 1979）であるだろう。ネーゲルによれば、性愛の本質は「相互人格的な性的認知」にある。たとえば、ロミオとジュリエットがセックスをしており、彼女たちは互いに、相手の裸を見て興奮しているとしよう。しかしそれだけでは、ネーゲルのいう性的認知は生じていない。ネーゲルによれば、性的認知が生まれるためには、ロミオがジュリエットに対して興奮し、次にその興奮を認知したジュリエットがまさにその認知により興奮し、さらにその興奮を認知したロミオが…といったような仕方、性的行為の当事者たちが再帰的な性的興奮の構造のなかに入っていなければならない。さらに言えば、性的行為の当事者たちはこのような構造自体を実現する意図——平たく言えば、「相手に快楽を与えたい、またそのことにより自分も快楽を得たい」という意図——をもたねばならない。ネーゲルは、理性・他者・意図といった概念を「相互人格的な性的認知」として結びつけ、そのうちで展開される性的行為こそが本来的だと考えている。言い換えれば、相互人格的な性的認知を伴わない性的行為は倒錯的だとみなされる。

もうひとりの著名な論者であるゴールドマン（Goldman 1977）は、「性的欲望とは、他者の身体との接触への欲望、および、そのような身体的接触が生み出す快楽への欲望である。そして性的活動は、行為者のそのような欲望を実現しがちな行為である」（ibid.: p.268）と述べる。その上で、「この定義の核心にあるのは、性的欲望や性的活動の目的は身体的接触それ自体であり、この接触が表現するかもしれない他の何かではないという事実だ」（ibid.）と主張する。ゴールドマンは、グレイとは異なり、性的行為は性的快楽を伴う行為だと単純に考えているわけではない。そうではなく、性的行為は、他者の身体に触れたという欲望に基づく行為だとされる。このような定義では、相互人格的な性的認知といった過剰にもみえる理性的側面は落とされているものの、「他者の身体との接触」を目的とした意図というかたちで、性的行為における人格的側面と認知的側面はある程度維持されている。

しかし、ソーブル (Soble 2022) が強調するように、性における他者性を重視する立場は、二人の人間が行うセックスこそがもっとも基礎的かつ自然でありその他の性的行為は倒錯しているといった保守的な見解へと導かれやすい。ソーブルは、他者性を重視する理論を「二元論モデル」と呼び、これと対照的に性を自己完結的に捉える「一元論モデル」の魅力を次のように述べている。

私の性の哲学や、ラジャ・ハルワニおよびイゴール・プリモラツツの哲学を別にして、この研究分野における多くの論者の性の哲学は、人間の性を分析ないし記述する際に二者間の相互作用を本質的に参照する二元論モデルを採用している。それによれば、ペアで行われる性的行為に規範的、概念的、あるいは存在論的な優位性が認められ、そしてこうした観点からその他の人間の性的世界が評価される。(ibid.: p.86)

人間の性についての別のアプローチとして、一元論モデルがある。一元論モデルによれば、性は本性的に人間同士の関係ではなく、また性的欲望は定義上、他者やその身体と結びつくものではない。性的欲望とは、心地よい感覚（これが「性的」と呼ばれうる）を求める欲望なのである。[……] 一元論モデルは、異性愛者のペアという形式からの逸脱がそれ自体で有害な倒錯であるとは主張しないし、またその逸脱を推し進める要因が、生物学的な諸事象の自然な流れを歪めるとも主張しない。結果として一元論モデルは、性的に普通ではない者についてのより共感的な臨床心理学をもたらすのである。(ibid.: pp.87-8)

ゴールドマンは性に関してリベラルな立場を志向する³。しかしソーブルに言わ

3 ゴールドマンによれば、セックスについての支配的な考えは「プラトン主義的キリスト教道徳」を反映し、そして生殖や愛情表現などの外在的目的を設定している (cf. Goldman 1977: p.279)。しかしこういった考えは、性的行為や性的欲望そのものの価値を軽視しており、また目的から外れた性的行為を逸脱や倒錯と結びつけ誤った性道

せれば、「リベラルな論者が二元論モデルを採用する理由はないにもかかわらず、「性的欲望」を「他者の身体との接触を求める欲望」とするゴールドマンの分析には、二元論モデルがあきらかにみてとれる」(ibid.: p.87) のであり、ゴールドマンは自らのリベラリズムを徹底できていない。

そして、本稿にとってとりわけ重要なのは、二元論モデルが捉え損なう「自慰」の問題である。自慰はきわめて一般的かつ単純な行為であり、かつそれが性的な行為であることは間違いない。しかし二元論モデルでは、自慰のそうした単純性を捉えられないばかりか、それを倒錯ないし非性的行為として判定してしまう可能性がある。ゴールドマンは自慰を説明する際、「覗き見やポルノ映画を見ることはたしかに性的活動として規定されうが、それも現実の事柄の想像的代用として性的活動であるかぎりにおいてである（さもないければ、私たちの定義で表現されている標準からの逸脱事項である）。パートナーなしの性的活動である自慰についても同様である」(Goldman 1977: p.270) と述べている。ネーゲルにせよゴールドマンにせよ、二元論モデルを採用する論者は、「相互人格的なセックス」や「他者の身体に触れようとする性的行為」の代替行為として自慰を位置付けることになる。しかし自慰は、複雑な認知を必要とせず単純に、かつ一般的に行われており、必ずしもセックスの代わりであるとは限らない性的行為である。たとえば、性的なパートナーがいるにもかかわらず、ときおり自慰をそれ自体として楽しむ人はめずらしくないだろう。

さらに、自慰を非逸脱的な性的行為とみなすメリットとして、ドール（ないしロボット）やキャラクターといった人工物に対する性愛をうまく扱うことができるかもしれないという点が指摘できる。人間同士のセックスを基礎とする二元論モデルを採用する限り、非人間的で非理性的な対象への性愛は倒錯ないし非性的だとされる。したがって、二元論モデルを保持しながらそうした帰結を避けるためには、ドールやキャラクターのうちにはある種の人間性ないし理

徳を教示してしまう。ゴールドマンはこれを性に関する「手段-目的分析 (means-end form)」と呼び、その保守性を糾弾している。

性があり、そしてそうした対象とは合意に基づくセックスを行うことができるという議論を展開する必要がある。実際、ニーホルム (Nyholm 2022: p.577) の研究にあるように、デイヴキャットという著名なセックスドール性愛者は、ドールはたんなるモノではけっしてなく、ドールとのセックスが可能だと主張している⁴。しかし、一般にドールやキャラクターといった人工物に人間性ないし理性があることを説得的に示すことは容易でない。したがって、ドールやキャラクターを愛する者が、ドールとのセックスが性的倒錯ではないと主張するため、その人間性ないし理性に訴えることはあまり現実的ではない⁵。むしろ、二元論モデルを捨て、「ドールやキャラクターへの性的興奮に基づく行為は一種の自慰であるが、それでも非倒錯的な性的行為である」と主張するほうがより望みがあると考えられる。

こうした理由のため、セックスからの逸脱的な派生ではない仕方で自慰を扱うことが動機づけられる。そして、マックイーンの定義はそうした自慰の扱いを可能にする。彼女の言う「自分自身または性的行為を行う相手の性的欲望を満たす行為」は、自分自身の性的欲望を満たすためだけの行為 (すなわち自慰) と、相手がいるセックスを選言的な仕方で結んでおり、どちらか一方に優位性を置いていない。これは、ネーゲルやゴールドマンのような二元論モデルではなく、また自慰を基礎にしてセックスをいわば「相互的な自慰」のように解釈する一元論モデルでもない。

ここまでの議論をまとめよう。性的行為を定義しようと試みる際、行為と性

4 本稿の著者の一人である大畑は、デイヴキャットに直接インタビューを行った人類学者・濱野ちひろ氏との個人的な会話において、デイヴキャットはセックスドールに魂を認め、ドールとの間に合意に基づくセックスや結婚が成立可能であることを信じていることを確認した。

5 ここで念頭に置いているのは、AI (人工知能) を搭載していないドールである。(デイヴキャットのドールも、AI を搭載していない。) AI搭載型ロボットに関しては、その同意能力の有無が積極的に検討されている (cf. Frank and Nyholm 2017)。また動物についても、濱野 (2019) の人類学的研究で示されているように、動物性愛者の多くはパートナーの動物 (主に馬と犬) に理性を認め、パートナーとの間に合意に基づくセックスが可能だと信じている。したがって、AI搭載型ロボットや動物との性愛を考えるにあたっては、二元論モデルでも問題がないかもしれない。

的快樂を単純に結びつけることはできない。そうではなく、性的行為は性的快樂を生むよう意図された行為とみなすべきである。しかし性における意図に着目することは、理性や他者といった概念と結びつきやすく、二人の人間が行うセックスこそが基本であるとする二元論モデルへと着陸してしまうおそれがある。したがって我々は、理性や他者といった概念を排して、意図だけをうまく取り入れる性的行為の定義を目指す必要がある。そのような観点から、マックイーンの定義はよくできていると評価できる。

2 マックイーンの定義の改良

我々がこれから行うのは、マックイーンの定義を改良する試みである。その概要は以下である。我々はリベラルな性的行為の定義を採用すべきである。マックイーンの定義は、ネーゲルやゴールドマンに比べるとよりリベラルであるが、「性的欲望」という概念を含んでいる点で十分ではない。したがって、「性的欲望」という概念を用いずに、マックイーンの定義の利点を維持できる定義を提案すべきである。

マックイーンによれば、性的欲望を満たすことを意図していない行為は性的行為ではない。彼女が例に挙げるのは、二人の人間が互いに性的欲望をもたず純粹に生殖目的や宗教的義務に基づいて行うセックス、また、自分の性器のサイズを測るためペニスを勃起させるケースである。この種のケースに関して彼女は、「性的欲望がなく性的快樂を経験する意図もない」(McQueen 2021: p.453)と述べている。これはたしかに一面では正しいように思える。ペニスのサイズを図るための勃起、あるいは純粹に生殖目的のセックスは、少なくとも性的な対象を欲望する行為ではないと言えそうだ⁶。

6 厳密に言えばマックイーンは、これらの行為は性的活動ではないが「性的交接 (sexual intercourse)」であると述べている (McQueen 2021: p.453)。しかし活動と交接の違いは説明されておらず、この箇所は余計な概念を増やして問題を先送りしているだけであるとの印象は拭えない。

しかし、上記のような行為を「性的ではない」と断言することは難しい。まず、たとえば医者が検査のために患者のペニスを勃起させることは、他の医療行為とは何か重要な点で異なる行為であるように思える。自分が患者の立場であったとして、今すぐ性液を検査する必要があるので向こうのトイレで射精して性液を採取してきてほしいと医者に言われたとしよう。性液を尿に置き換えれば、これはしばしばあることだ。しかし病院内のトイレで性液をとることは、同じように性器に触れることになる尿採取とは違い、あきらかに強い心理的抵抗が存在する。次に、二人の人間が純粋に生殖・宗教的目的にしたがって行うセックスについて検討しよう。これについても、もしセックスを行うことなく、たとえば体外受精などの仕方ですべての目的を果たすことができるのであれば、セックスという手段を避けたいと考える者は少なくないはずだ。では、こうしたケースで勃起・射精やセックスに抵抗が生じるのはなぜか。その理由は、まさにその行為が「性的」であるからだろう。このように、性的欲望を満たすことを意図していないにもかかわらず、性的とみなしたくなる行為は存在するのだ。

では、これまで述べてきたような行為を「性的」とする要因は何なのだろうか。我々の考えでは、それは性的快楽を得ようとする意図に他ならない。医療目的の射精であれ生殖のためのセックスであれ、性器のサイズを測るために勃起を促す行為であれ、それが首尾よく行われるためには、そこに快楽が介在するはずだ。つまり、快楽が生じなければ勃起や射精には至らないと考えられる。そして、第1節で性的快楽が器質的に定義されていたことを思い出せば、この快楽は性器的快楽である以上性的快楽である。そして、医療目的の射精や生殖のためのセックスに心理的抵抗を感じる理由の一部は、我々が性的快楽を感じること、およびその姿を晒すことに対する羞恥心や屈辱感だと考えられる。以上を踏まえると、マックイーンがこうしたケースについて「性的欲望がなく性的快楽を経験する意図もない」と述べたのは性急な判断であったことがわかる。というのも、少なくともこの場合、性的快楽を経験する意図が存在するか

らだ。最終的な目的が非性的であったとしても、そのために自発的にペニスを勃起させたりセックスを行ったりするならば、その成功のために性的快楽を得ることが必要である以上、そうした行為は性的快楽を得ようとする意図を含まざるを得ない。そして、性的快楽を得る意図を含んでいるからこそ、これらの行為は性的だとみなされるべきなのである。

次に、性的欲望について論じよう。マックイーンにおいて性的欲望は、「性的快楽への欲望」とされていた。しかし直観的に、医療目的の勃起や生殖のためだけのセックスが性的快楽を得ることを意図していたとしても、そこに「欲望」はないように思える。ここでヒントとなるのが、性的欲望に関するハルワニ（Halwani 2018）の記述である。彼は、性的欲望を満たすとは何を意味するのかと問い、それは「その欲望をとりあえずもう感じない」ことや「その欲望が消え去る」ことではないと主張する（ibid.: p.163）。なぜなら、そのように考えるならば、性的欲望を抑えるために薬を飲んだり冷たいシャワーを浴びたりすることが性的欲望を満たす行為になってしまうからだ。だが、もちろんそうではない。ここからハルワニは、「性的欲望を満たす」ことの意味は、「性的欲望の目的（goal）を達成すること」だと示唆する（ibid.）。この言明を我々なりに敷衍してみると、性的欲望は何らかの性的な出来事、すなわち性的快楽を含む出来事をそれ自体として求めるものであり、そして性的欲望の達成とは、その出来事が達成されることである、と言える。このように考えると、医療目的の勃起や生殖目的のセックスが、なぜ性的欲望を含まないのかがわかる。これらの行為はたしかに性的快楽を得ることを意図しているが、その快楽は医療や生殖といった別の目的のための道具にすぎないのだ。言い換えれば、性的快楽をそれ自体としては求めていない。それゆえ、ここに性的欲望はないと言える⁷。

7 ここで性的欲望を含まない行為として考えられているのは、医療・生殖・宗教的目的しかもたない行為である。他方で、性的快楽と（たとえば）生殖の両方を目的的に追求するセックスは、性的欲望を伴うと言えるだろう。マックイーン自身、性的行為には性的欲望の追求以外の目的（生殖や運動など）があつてよいと考えている（cf.

性的行為の定義

ここまでの議論を整理しておこう。性的快楽を得る意図には、その快楽をそれ自体として求める意図と、その快楽を道具的に求める意図の二種類がある。そして、ハルワニの議論を参考にすれば、前者のみが性的快楽への「欲望」だと言える。以上から、性的行為は性的欲望に基づく行為であるというマックイーンの定義にしたがう限り、後者のケース（生殖のためだけのセックスなど）は性的行為ではなくなる。しかし我々は、これを性的行為に分類せねばならないと考える。ある行為が性的快楽を経験しようとする意図を含んでいるならば、その快楽が道具的であれ、行為は性的とみなされるべきだ。

マックイーンの定義に代えて、我々が提案するのは以下の定義である。

性的行為：自分自身が性的快楽を得る、または、相手に性的快楽を与えることを意図した行為

我々は、マックイーンの定義から「性的欲望」という部分を削っている。この新しい定義では、性的快楽を得ることが道具的にでも意図されているなら、その行為は性的になる。したがって、生殖・宗教的目的のセックスや性器のサイズを測るケースも、性的行為として扱われる。この定義は、意図という最低限必要な認知的要素を含みつつも、可能な限りリベラルに性的行為を考えようとするものである。

3 想定される反論への応答

本節では、ここまでの議論に対して想定される批判に応えることを通じて我々の主張をより明確化しておきたい。まず、我々の定義には反例があるとい

McQueen 2018: p.453)。彼女が性的行為ではないと考えているのは、そして我々が彼女に反対して性的行為であると考えているのは、性的欲望の追求以外の何かだけ为目的とするセックスである。

う批判を取り上げる。次に、我々が前節で行なったマックイーン批判は、彼女に対する恣意的な読解を含んでいるという批判を検討する。

第一に、性的快楽を与えようとする意図は性的行為にとって十分条件ではない、という批判を取り上げよう (Soble 1996, Halwani 2018)。ハルワニ (Halwani 2018: pp.162-3) は次のような例を挙げる。ジョンは「シマリス (chipmunk)」という語を聞くとつねに性的に興奮する。ジョンを性的に欲望しているわけではなく、たんにジョンの反応を面白がってジョンに対して「シマリス」という音を繰り返し聞かせる行為は、性的快楽を与える意図はあるけれども性的行為ではないだろう。これは、我々の定義に対する反例となっている⁸。

この批判に対して、まず、ジョンに対して「シマリス」という音を意図的に聞かせる行為を性的行為とみなすことはそれほど不自然でないという点を指摘したい。ジョンは、公共空間において、自らの性的傾向をよく理解している者から「シマリス」を聞かせられることに羞恥心や屈辱感を感じるであろう。そうした感情は、たとえば人前で肩を揉んでもらうなど、公共空間で快楽を与えること一般に対しては生じない独特のものであるだろう。そうした感情が生じることは、ジョンに対して「シマリス」を聞かせる行為が性的だと考えればうまく説明できる。というのも、多くの人間が見ている前で性的行為を仕掛けられたときに羞恥心や屈辱感を感じるのは自然であるからだ⁹。したがってこのケースは、必ずしも我々の定義に対する反例にはならないと考えられる。

他方で、「シマリス」ケースを性的行為から除外したくなる感覚も理解可能である。というのも、ジョンに対する行為には性的欲望がなく、したがってこ

8 ソーブル (Soble 1996: p.132) はまた、意図は性的行為にとって必要条件でもないと述べている。しかしその議論は、ミシンによって性的快楽が生まれるケースは性的行為であると強弁するものであり、直観に反すると考えられるため、ここでは扱わない。

9 もちろん、ジョンが「シマリス」を公共空間で聞かせられることによりさらに性的に興奮するという性的嗜好を有していたならば、彼はこのことに抵抗を感じないかもしれない。しかしこのことにより我々の議論が成り立たなくなるわけではない。このときジョンは、公共空間における性的行為を好んでいたのである。

それは典型的な性的行為ではないからである。だが、性的行為の定義そのものに性的欲望を含める必要はない。我々は、性的行為の下位分類として性的欲望を含むものとそうでないものを区別すればよい。性的欲望なき道具的な性的行為は非典型的ではあるが、それでもなお性的行為であるのだ。もちろん、性的行為を分類するうえで性的欲望の有無や種類は重要である。たとえば、性的パートナーを選ぶような文脈においては、自分がどのような性的欲望をもつのか、それに基づいてどのような性的行為を行うのかが重要になるだろうし、性的欲望を伴わない道具的な性的行為はとくに問題にならないだろう。だが、そうした文脈があることは、道具的な性的行為というカテゴリーを否定する理由にはならない。

第二の問題に移ろう。マックイーン自身は、性的欲望に関して多くの議論を行なっているわけではない。彼女はたんに、性的欲望とは性的快楽への欲望であると述べているにすぎない。マックイーンの定義にある「性的欲望」という語を「性的快楽をそれ自体として追求する欲望」とみなし、その上でその定義を退けるのは、彼女に対して不寛容なのではないか。

たしかに、何の限定もなしに（すなわち目的的であれ道具的であれ）性的快楽を求めたり与えたりすることを「性的欲望」と定義するならば、「性的欲望の実現を意図する行為」というマックイーンの性的行為の定義は、我々のものと同じになる。このとき、たとえば生殖のためだけに行われるセックスも、性的欲望に基づく行為とみなされて、性的行為に数え入れられるだろう。だが、このようなマックイーンの定義の解釈は、性的欲望についての特定の解釈を前提としている。そして、性的欲望をそのように解釈することが正当化されるかは明らかでない。そのため、マックイーンの定義を前提として道具的な性的行為を認めようとする、性的欲望とは何かという論争的な問題に巻き込まれてしまう¹⁰。本稿が目指したのは、性的欲望については中立的なまま、性的行為

10 性的欲望についての現代の議論では、性的欲望は本質的に志向性をもつと述べその複雑性を重視する（Morgan 2003）と、性的欲望はもっぱら身体的興奮を中心として

についてできる限りリベラルな定義を与えることである。そして、性的欲望の本性をめぐる問題は、性的行為を定義したのち、その下位分類にかかわる論点として考えればよい¹¹。我々の見立てでは、性的行為をめぐる具体的な社会実践を評価ないし検討するためには、まず、性的行為の範囲を包括的かつ解釈の余地の少ない仕方決定することが望ましい。たとえば、公共の場での性的行為をどのように規制するかという問題を論じる上では、(議論の前提となる)性的行為の範囲をめぐって「性的欲望」という概念の解釈にかかわる論点が出てくるよりも、性的行為の範囲が定められた後に、規制の種類や強さを検討する場面でその論点が出てくるほうが、より生産的だと考えられる。そのため、マックイーンの定義から「性的欲望」という概念を削った我々の定義のほうが望ましいのである。

本稿の目的は、性的行為の新たな定義を打ち立てることであった。本稿の議論をまとめよう。マックイーンの性的行為の定義は、性的快楽をベースに置きつつも意図的側面を取り入れたものであり、そのバランス感覚のゆえに既存理論の難点を払拭するものであった。しかし彼女の定義は、道具的に性的快楽を求める行為を性的行為へと分類できないという点で不十分なものだった。ここから我々は、マックイーンの定義から性的欲望という概念を捨象し、性的快楽への意図のみに言及する性的行為の定義を構築した。この定義は、既存の性的行為の定義のなかでもっとも単純でありリベラルなもののひとつだと言える。

理解されるべきだとする (Jacobsen 1993) が両極として存在する。近年、その間を縫うような論文として、性的欲望は性的快楽への欲望であるが性的快楽は複雑なものだとする (Halwani 2020) が発表された。

- ¹¹ ただし、性的欲望が本来的に非意図的なものだとすると、その欲望に基づく行為を、意図的行為としての性的行為の下部に分類することはできなくなる。性的欲望についての非意図性ないし無意識性を主張したのは、周知の通りフロイト (1968) である。このとき性的欲望に基づく行為は、性的行為とは根本的に異なる行為として定義されるだろう。

参考文献

- Abramson, P. R., & Pinkerton, S. D. 1995. *With pleasure: Thoughts on nature of human sexuality*. Oxford University Press.
- Frank, L., & Nyholm, S. 2017. "Robot sex and consent: Is consent to sex between a robot and a human conceivable, possible, and desirable?" *Artificial Intelligence and Law*, 25 (3), 305-323.
- Goldman, A. 1977. "Plain sex." *Philosophy & Public Affairs*, 6 (3), 267-287.
- Gray, R. 1978. "Sex and sexual perversion." *Journal of Philosophy*, 75 (4), 189-199.
- Jacobsen, R. 1993. "Arousal and the Ends of Desire." *Philosophy and Phenomenological Research*, 53 (3), 617-632.
- McQueen, P. 2021. "Sexual Interactions and Sexual Infidelity." *Journal of Ethics*, 25 (4), 449-466.
- Morgan, S. 2003. "Sex in the Head." *Journal of Applied Philosophy*, 20 (1), 1-16.
- Nagel, T. 1979. "Sexual Perversion." In *Mortal questions*. Cambridge University Press. (ネーゲル・T、「性的倒錯」、『コウモリであるとはどのようなことか』(永井均訳)、勁草書房、1989年。)
- Nyholm, S. 2022. "The Ethics of Humanoid Sex Robots." In B. D. Earp, C. Chambers, & L. Watson (Eds.), *The Routledge Handbook of Philosophy of Sex and Sexuality*. Routledge.
- Primoratz, I. 1999. *Ethics and sex*. Routledge.
- Scruton, R. 1986. *Sexual Desire: A Philosophical Investigation*. Weidenfeld & Nicolson.
- Shaffer, J. A. 1978. "Sexual Desire." *Journal of Philosophy*, 75 (4), 175-189.
- Soble, A. 1996. *Sexual investigations*. New York University Press.
- Soble, A. 2022. "Masturbation and the Continuum of Sexual Activities." In R. Halwani, J. M. Held, N. McKeever, & A. Soble (Eds.), *The Philosophy of Sex: Contemporary Readings, 8th edition*. Rowman & Littlefield.
- Solomon, R. 1974. "Sexual Paradigms." *Journal of Philosophy*, 71 (11), 336-345.
- Halwani, R. 2018. *Philosophy of Love, Sex, and Marriage*. Routledge. (ハルワニ・R、『愛・セックス・結婚の哲学』(江口聡ほか訳)、名古屋大学出版会、2024年。)
- Halwani, R. 2020. "The Sexual Pleasure View of Sexual Desire." *Philosophical Papers*, 49 (1), 107-135.
- 濱野ちひろ、『聖なるズー』、集英社、2019年。
- フロイト・S、『夢判断』(高橋義孝訳)、『フロイト著作集』第2巻、人文書院、1968年。